

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (138)

2023年3月の作品は
「満洲魯西亜境界図」

展示テーマ

～ 地図に見る幕末における日露関係 ～

幕末における日本の外交は鎖国下にありながら、ペリー（1794～1858）の黒船来航に始まるアメリカからの干渉や、ラクスマン（1766～1796 年）の根室来航に始まるロシアからの干渉など、海外から興味を強く持たれていた。また、日本国内でも「蝦夷地」に関する興味が高まっていた。そのことは、1798年から1799年にかけて行われ、その結果、択捉島に「大日本^{オオニッポン}志士^{シシ}呂府^{ロフ}」の碑を建てた近藤重蔵（1771～1829）や、1808年に樺太を調査し、島であることを発見し、その後地図を残し、樺太島とユーラシア大陸の間の海峡に名を残す間宮林蔵（1775 年～1844）などの北方領土探検からわかる。

では、当時の日本、そしてロシアから見た樺太、そしてかつて「満州」とされていた地域である中国東北部は日露それぞれにおいてどのような土地とされていたのだろうか。この地図を通じて分析を進めていく。

元国際総合科学部経済学コース

「満洲魯西亜境界図」

江戸時代、嘉永7年（1854）

作者：竹邇^{たけはる}居士

縦 66cm × 横 44cm

作者は竹邇居士とされているが、これは今で言うペンネームのような物で、「居士」は仏教用語である。

「居士」とは家に居ながら仏教の修行を行う人物のことであり、どこにも仕えることなく勉学に励む人のことも指すため、作者の正確な名前は判明していない。この地図はオホーツク海を中心に、現在の北海道（当時の「蝦夷地」）、北方領土からカム



チャッカ半島など、ロシア東部、また中国東北部が描かれている。またロシアの領土とされている部分は薄黄色、日本の領土とされている部分は赤色、中国の領土とされている部分は緑色で描かれていることがわかる。当時の露清間の国境はネルチンスク条約（1689）によって定められており、この地図の国境と概ね一致している。また、



日露間の国境も日露親善条約（1854）によって定められているが、この条約は同年12月に締結された条約であるためこの地図の国境とは関係がない。ただ、この地図の作者の認識では日露間の国境は図のようであると考えていたことがわかる。そして、左図によるとこの当時から北方領土の島は現在の名前と同じまま描かれているが、千島列島は「クリルスキヤ諸島」となっており、そこに添った形で航路が示されていることがわかる。

またこの地図では左図のように樺太が島ではなく



半島として大陸の一部のように描かれている。間宮林蔵 (1775カ ~ 1844) が間宮海峡を発見し、樺太が島であることを確認するまでは、「樺太は半島である」と言う認識が一般的であった。江戸時代の経世家である林子平 (1738 ~ 1793) が天明6年 (1786) に出した『三国通覧図説』には“カラフト峰”と名付けられ大陸の一部として描かれていることや、老中松平定信も、通詞本木仁太夫が和訳した『阿蘭陀製全世界地図書』によって、樺太は半島であり、それを島らしいと憶測するのは誤りである。

と書き記したことから、当時の日本の有識者たちは、樺太半島説を信じ、さらに北方地域の最高の研究者である近藤重蔵も、その説を支持したことによって、樺太半島説がより有力なものとなっていたことがわかる。したがって、この古地図が描かれた時代も依然として樺太半島説がより有力な説となっていたことがわかる。

展示のみどころ

～ “立” にみるこの地図の作成目的 ～



私がこの地図の中で注目してもらいたいポイントは古地図の沿岸部に書かれている“立”という漢字である。特に左図のように中国の東北部の川沿いや、図にあるようなロシアの沿岸部に集中していることがわかる。また、それぞれの“立”には名前が振られており、全てに共通しているのは“番所”であるということだ。では、そもそも

“番所”とは何であろうか。辞典的な意味を書けば、「江戸時代に交通の要所に設置して船舶や行人を検閲・監視し、あるいは税を徴収した役人の詰所。各船改番所のなかでも幕府の浦賀番所は著名。陸路でも要地には幕府や諸藩の

番所があり、天領・私領の境には口留番所があった。関所を番所と称した所もある。」(『日本大百科全書』) というものであり、簡単にいうと役人がある場所である。また、日本の領土とされている土地には“立”のマークが書かれていないが、このマークの中には、航路の着岸点となっている場所もあるため、日本の領土とされている土地の中にも同様の施設があったのではと推測できる。この推測を基に以下のように『山川 詳説日本史図録』の資料と古地図を比較してみると、どちらも“白主”(古地図では“シラヌシ”とある)に航路が繋がっており、古地図で“立”のマークが書かれているところは、左図の資料では“デレン”と書かれており、運上屋・会所が置かれている。以上のことから、“立”は運上屋・会所が置かれている番所であったのではないかと推測できる。『日本大百科全書』によると、運上屋・会所は蝦夷地における場所請負人の交易場の経営拠点とある。簡単にいうと、現地の人々との交易場である。したがってこの古地図は、当時の“蝦夷地”の人々や“満州”とされていた地域の人々、ロシア沿岸部の人々との交易を行う日本の商人に向けて作られた地図なのではないかと考えられる。

参考文献

- 詳説日本史図録編集委員会編『山川 詳説日本史図録』第6版 (山川出版社、2013年)
- 吉村昭著『間宮林蔵』(講談社、1982年)
- 国立国会図書館デジタルコレクション (最終閲覧日 2020年8月3日)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/963392?contentNo=36>

あとがき ～貴重資料に触れて～

私は日本史が元々好きな科目だったため、受験に使う知識にとどまらず、様々な資料に触れて知識を深めていきたいという気持ちがありました。今回扱った古地図は今ではなかなか目にする機会がないので、一つ一つ調べながら進めていく作業は、中身の伴った経験としてとても良い経験になりました。今後の自分の気になった事柄について知識を深掘りしていきたいと思います。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、
展示品を除き申請が必要です。また、利用は
学術研究目的に限らせていただきます。

令和5年3月1日発行
令和元年度 日本文化論A 受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター

第139回展示は令和5年4月上旬からを予定しています。